

校長のメッセージを発信する

～学校だよりの巻頭言～

The Messages from a Principal in the School Newsletters

石鍋 浩

ISHINABE Hiroshi

要 約

小学校、中学校、高等学校では児童・生徒の学校生活や教育活動での様子を保護者や地域の方々へ周知するために「学校だより」を配布している。学校だよりの巻頭言では、校長が学校教育や学校経営、時には子育てなどについてメッセージを発信する。本稿では、私が校長時代に執筆した学校だよりの巻頭言のいくつかを紹介する。校長先生や副校長先生、教頭先生やミドルリーダーの先生方にとって、学校経営、学校運営、保護者・地域との関わりへの参考にしていただけたら幸いである。

1. はじめに

校長として学校教育や学校経営に関するメッセージを発信する場は多々ある。保護者や地域住民を対象にした場合には、保護者会、学校行事、地域での会議、学校ホームページ、学校だよりなどが考えられる。ここでは、昔から全国どこの学校でも作成している「学校だより」に焦点を当ててみたい。学校だよりは、基本的には保護者や地域の方々に対して、また、子供たちに対して、学校の様子を知らせるとともに、学校が考える教育の方向や具体策などを知らせる役割を果たしている。その中でも巻頭言は、校長が自らのメッセージを発する重要な役割を果たしている。

私は10年間の校長経験の中で約100本の巻頭言を書いてきた。当時の学校や社会の状況に合わせて校長としてメッセージを発信してきたつもりである。本稿では、学校だよりにおける校長のメッセージは、どのようなねらいをもって発信されるものな

のか、また、具体的にはどのような内容なのか、配慮点は何かなどについて、私が実際に書いた拙文をもとに考えていくことにする。

2. 学校だよりの巻頭言で大切にしたこと

私は、次のような点を大切にして巻頭言を書いてきた。どの校長先生方もほぼ同じような意識であると思うが、とても重要と思うのであえて記す。

- (1) 発信の対象は、保護者と地域住民とする。
- (2) 「学校経営」「学習指導」「生活指導」「学校行事」「教育課題」「危機管理」等を柱に内容を構成する。
- (3) 学校や社会の状況に合わせて、できるだけ具体的な内容とする。
- (4) 伝えたい校長のメッセージを明確にし、専門用語でないわかりやすい言葉を使用する。
- (5) 巻頭言の内容は、教職員へのメッセージでもあり、生徒への指導にも活用しやすいものとする。

3. 巻頭言の実際

私が執筆した学校だよりの巻頭言の代表的なものを紹介する。当時、巻頭言の題材や内容を探すのにとても苦労したことを思い出す。同じような悩みを抱かされている校長先生は多いかもしれない。ここで紹介する内容が、校長先生方が巻頭言の題材や内容で困った際に少しでもヒントになってくれたらうれしい限りである。

(1) 学校教育目標と育てたい生徒像

【ねらいと留意点】

年度の初めに学校教育目標を示すことは、学校がどのような教育活動を行っていくのかということを保護者や地域に周知することになる。また、学校教育目標に沿って育てたい生徒像を具体的に示すことにより、学校が目指す姿をさらに明確に伝えていくことができる。執筆に当たっては、できる限りわかりやすく伝えていくことに配慮する。

【巻頭言】

今回の学校だよりでは、学校教育目標と今年度育てたい生徒像について考えてみたいと思います。本校の学校教育目標は『健康 明るくたくしく 少しずつ賢くなる』です。

三つの柱ごとに育てたい生徒像について考えてみます。まずは「健康」についてです。健康とは身体健康はもちろんですが、心の健康も大切であると考えます。心身の健康が人間の生活にとって基本であるということは言うまでもありません。そこで、今年度は特に次のような生徒の育成を目指します。

○基本的生活習慣を身に付けた生徒 ○運動習慣を身に付けた生徒 ○体験が豊富な生徒

次に「明るくたくしく」についてです。毎日の学

校生活が明るく楽しく充実したものであれば、生徒たちは日々達成感や成就感を味わうことができ、自らの成長を実感できるはずでです。そこで、次のような生徒の育成を目指します。

○自他の生命を尊重し、善悪の判断ができ、規範意識をもつ生徒 ○基本的生活習慣を身に付けた生徒 ○自主性、協調性を身に付けた生徒 ○社会に貢献できる生徒 ○望ましい人間関係をつくることのできる生徒

最後は「少しずつ賢くなる」についてです。学校は言うまでもなく様々なことを学習する場です。教科等の学習を中心に、大人になるための基本的なことを学習する場です。そこで、次のような生徒の育成を目指します。

○基礎・基本を繰り返し学習する生徒 ○意欲をもって学習する生徒 ○言語力を身に付けた生徒 ○学習の仕方を理解している生徒 ○学習習慣が確立している生徒

いつの時代も「学校・保護者・地域の皆様が同じ目標に向けて進んでいく学校は、素晴らしい学校である」と言われています。ぜひ、保護者、地域の皆様のご理解とご支援をお願いいたします。そして、今まで以上に素晴らしい「〇〇中学校」を創り上げていきたいと考えています。

(2) 学力向上に向けて

【ねらいと留意点】

どこの学校でもいつの時代でも学力向上は重要な教育課題である。学習指導の充実をはじめとする学力向上に向けた学校の方針を発信し、保護者や地域の皆様の理解を求めていきたい。なお、年度の早いうちに執筆し、保護者会や地域の会において、校長の挨拶などで活用できるような具体性

のあるものになりたい。

【巻頭言】

学力向上はどの学校でもいつの時代でも重要な教育課題です。本校においても、学力向上に教職員がひとつになって取り組んでいます。今年度の取組の一部を紹介します。

1 日常的な授業改善

教師主導型でなく生徒が主体となり学習できる授業をめざし、授業改善を図ります。授業改善のための主なポイントは、「生徒の学習量・活動量を増やす」「言語活動の場を多く設定する」「一人ひとりのよさを積極的に評価する」「授業のねらい・発問を明確に提示する」「管理職による授業観察の際にはDVD撮影し振り返りに活用する」「生徒による授業評価を活用する」などです。

2 校内研究

テーマ「思考力、判断力、表現力等を育てる学習活動の工夫～言語活動で授業改善～」のもと、各教科において年間通して研究を進めていきます。研究授業の際には、近隣の小学校に声をかけ、授業参観だけでなく研究協議にまで参加してもらい、小学校教員からの意見を取り入れ、授業改善につなげていきます。また、本校は国立教育政策研究所の「学力把握実践研究協力校」の委嘱を受けており、英語科における授業については教育課程調査官から年間とおして指導を受けることになりました。

3 その他

夏季休業中や放課後の補充学習においては、小学校教員や元教員、大学生の協力を仰ぎます。漢字コンテスト、計算コンテスト、スペリングコンテストの実施をとおして生徒の学習習慣を確立します。各種検定にチャレンジさせることにより、一つ上の目標に向けて努力する意欲づけとします。校長の朝礼講話を5分間で200字にまとめることに取り組ませ、話を集中して聞く習慣づくりと聞いた話を文章にまとめる力の育成を図ってい

きます。

保護者や地域の皆様が学校にお出でいただいた際には、ぜひ学習指導をはじめとする学力向上への取組をご覧いただき、忌憚のないご意見やご感想をお寄せください。

(3) 朝礼講話「あいさつ」

【ねらいと留意点】

大人が見本を示せない時代になってきたと言われている。あいさつしても返すことができない大人も増えている。あいさつがあふれる学校づくりをとおして、相手に対する思いやりの心を育てることや助け合える集団作りができることを伝えたい。保護者会や地域の会での校長のあいさつでも使えるように、生徒や地域の実態に合わせて、内容の工夫を心がけたい。

【巻頭言】

最近では、隣近所の人と顔を合わせてもあいさつをしない人が増えていると言われていています。あいさつはコミュニケーションの基本であり、相手を敬う心を表すものです。私は日ごろからあいさつがあふれる学校づくりをしたいと考えています。先週の全校朝礼において、あいさつについての講話をしましたので、その一部を紹介します。

あいさつが大切であることは、皆さんなら知っていることですが、実は、大人の社会でもあいさつがとても重要視されています。経営心理学を専門とする大学教授は企業を例にあげて、次のように言っています。

- ・あいさつが減るとコミュニケーションのきっかけがなくなり、情報交換が滞る。その結果、『うっかりミス』が多発する。
- ・あいさつがさらに減り、あいさつの際に声を出さず、頭を下げるだけになると、多くの社員はストレスを感じ、『意識的に力を抜くこと』が増えたり、遅刻や欠席が増えたりして、会社が

良くない方向へ向かってしまう。

- ・さらに状態が悪くなって、頭を下げるどころか全くあいさつしなくなるとどうなるか。あいさつは、『攻撃性を減らす』という役割がある。よく思っていない相手でも、向こうから明るくあいさつされると怒りが薄れる経験は誰もがあはず。あいさつが全くない組織では、相手や組織全体への怒りが、膨れ続けてしまう。当然その会社は良くない方向に進み、ダメになってしまう。

大人の社会であっても、これほどまでにあいさつは重要なものなのです。今年は、学級委員、生活委員の皆さんが、バス通りや桜並木に出てあいさつをしています。ぜひ、ここにいる600人が元気な声で明るくあいさつをし、素晴らしいあいさつができる〇〇中をつくりあげてください。(以上、一部抜粋)

私たち大人は、子供たちのよき見本になっているでしょうか。私たち自身が今一度、自分の行動を振り返らなければならないと強く感じています。今年は「あいさつ運動」を生徒指導の核として学校教育を行っていきます。保護者、地域の皆様とも一緒になって「あいさつ」をとおして、子供たちを育てていければ幸いです。

(4) 「徳」「知」「体」をバランスよく育てる

【ねらいと留意点】

異動後約1ヶ月の巻頭言である。まずは校長が新たに出会った生徒たちの様子を良い点を中心に伝えていきたい。それを基に、どのような生徒に育ててほしいかということ伝えることにより、学校の教育方針等を示すことにつなげたい。また、保護者や地域の皆様に支援を依頼することにより、学校、地域、保護者が一体となって生徒を育てていくという姿勢を明確に示したい。

【巻頭言】

早いもので新年度が始まって1ヶ月が経過しまし

た。210人の生徒たちはとても落ち着いた学校生活を送っています。このような学校生活が成り立つのは、保護者、地域の方々の日頃からのご理解ご協力があるからこそと感謝申し上げます。

さて、私も〇〇中の校長として1ヶ月を過ごしましたが、この間に「さすが〇〇中生」と思う場面に多々会うことができました。始業式、入学式をはじめ朝礼や離任式で全生徒が集まった時の礼儀正しい落ち着いた姿はさすが〇〇中生と言わざるを得ません。〇〇中生の素晴らしさは、東京都はもちろん全国でも有名ですが、実際に目の当たりにして私はその素晴らしを実感することができました。

次に、授業中の姿です。教師の話聞く姿勢がしっかりしていることは言うまでもなく、自分たちから授業に関わっていく姿が随所に見られました。教師のちょっとした投げかけの言葉にも素直に反応できる姿は、簡単なようで簡単ではないのです。常に自分の思いを持ちながら教師の話聞いていないとできないことなのです。これからの授業においてもこのような生徒の姿を数多く見ることができると思うととても楽しみです。

現代の日本社会は、物質的な豊かさを手に入れた一方で、思いやりやいたわりなどの豊かな心を失ってしまったと言われています。だからこそ、学校において「豊かな心」を基盤に据え、「確かな学力」と「たくましい体」を育てていくことが必要です。このような世の中で、今の素晴らしい〇〇中生をさらに大きく成長させることが大切であると考え、今年度の学校経営計画の中で「目指す生徒像」を次のように設定しました(保護者会資料にも示してありますので参照してください)。

《〇〇中学校の目指す生徒像》

○多様で変化の激しいこれからの社会を生きるために必要な「豊かな心＝徳」「確かな学力＝知」「健やかな体＝体」をバランスよく有している生徒

- ・ 自他の生命と人権を尊重できる生徒
- ・ 基本的な生活習慣を身に付けた生徒（あいさつ、言葉遣い、身だしなみ）
- ・ 善悪の判断ができ、規範意識が高い生徒
- ・ 基礎的・基本的な知識・技能及び思考力・判断力・表現力を身に付けた生徒
- ・ 主体的に学習に取り組む生徒
- ・ たくましく生きるための健康と体力がある生徒
- ・ 地域への愛着と参画意識をもつ生徒

今年度は、このような目標のもと教職員が心をひとつにして全力で教育活動に取り組んでまいります。そして、今まで以上に素晴らしい〇〇中生を育てていく所存です。保護者、地域の皆様の厳しくも温かなご支援をお願い申し上げます。

(5) 「支えへの感謝」と「さらなる努力」～五輪選手のインタビューから感じたもの

【ねらいと留意点】

直近に行われたオリンピックでの競技後のインタビューに焦点を当てた。生徒が今後の学校生活に生かせることを選手の言葉や態度から学んでほしいと伝えたい。また、五輪という共通の話題を基に、「人の支え」「努力」について、保護者、地域の皆様、生徒と教職員が一緒に考えてほしいというメッセージも発している。

【巻頭言】

2学期が始まり、校舎内に生徒たちの元気な声に戻ってきました。6週間という長い夏休みを生徒たちはどのように過ごしたのでしょうか。学年や学級、部活などでどのような話が出てくるか楽しみです。

さて、今年の夏休みは、リオデジャネイロオリンピックが開催されました。オリンピックをご承知の通り、4年に一度、世界の超一流のアスリートが集まって力を競う大会です。素晴らしいパフォーマンスを眠い目をこすりながらテレビ観戦された生徒や

保護者、地域の皆様も多かったことでしょう。私も我を忘れるほど夢中になってしまった競技がたくさんありました。

そのような中、私は選手のインタビューにも惹きつけられました。メダルを取った選手の多くは喜びを言葉や表情で表現していました。さわやかな笑顔や涙はとても素晴らしいものでした。一方、思うような結果が出せずにとっても悔しい思いをした選手もたくさんいましたが、今回のオリンピックではそのような選手にも競技直後にインタビューをしていました。ある意味、とても酷なことと思いましたが、ほとんどの選手が誠実に丁寧にインタビューに答えていました。とてもつらい心境だったにもかかわらず、いくつものテレビ局のインタビューに真摯に答える姿には、本当に感心させられました。

また、メダルを取った、取らないにかかわらず、ほとんどの選手が共通して「家族や関係者の支えに心から感謝したい」「これからも今まで以上にさらなる努力をしていく」と言っていました。オリンピックに出られるような人はものすごく才能があるはずですが、それにもかかわらず、自分一人ではここまでできなかった、努力がまだまだ不足していたと考えているのです。これらの言葉を聞くたびに大きな感動を覚えました。

ご承知のように、本校はオリンピック・パラリンピック教育重点校です。特に、「ボランティア・マインド」の醸成に力を入れています。インタビューの答えにあった「支え」はまさに「ボランティア・マインド」に結び付けることができるものと考えます。2学期以降、生徒たちとともに、本校でできる「ボランティア」や「支え」について考え、取り組んでいきたいと思えます。また、生徒たちには「努力」する気持ちをオリンピック選手から学んでほしいと願っています。学校生活の機会あるごとに「努力」の意味と大切さを伝えていきたいと思えます。あわせて、私をはじめ教職員一同は、生徒たちと同様に「支え」「努力」という言葉を心に刻み、生徒

への指導に全力を尽くしてまいります。

2学期の始業式において、ここに記した内容と同じ趣旨の話をしてあります。ぜひ、保護者の皆様、地域の皆様が、ご家庭や町の中で「支え」や「努力」について生徒たちとお話いただけますと幸いです。

(6) 「見れた」と「見られた」／「出れる？」と「出られる？」

【ねらいと留意点】

この巻頭言では、文化庁の調査に基づき、言葉づかいの大切さについて考える。正しい言葉づかい、時と場に応じた言葉づかいを身に付けることは、相手を尊重し思いやることになることを伝えたい。あわせて、大人の役目についても保護者、地域の皆様と考えていくきっかけとしたい。

【巻頭言】

新聞記事でご覧になった方もいらっしゃると思いますが、文化庁は先日、平成27年度の「国語に関する世論調査」を発表しました。下の図を見てください。

		(ア)を使う	(イ)を使う	どちら も使う	分から ない
(1)	(ア) こんなにたくさんは食べられない (イ) こんなにたくさんは食べれない	60.8	32.0	6.8	0.4
(2)	(ア) 朝5時に来られますか (イ) 朝5時に来れますか	45.4	44.1	9.8	0.7
(3)	(ア) 彼が来るなんて考えられない (イ) 彼が来るなんて考えれない	88.6	7.8	2.9	0.8
(4)	(ア) 今年は初日の出が見られた (イ) 今年は初日の出が見れた	44.6*	48.4*	6.5	0.4
(5)	(ア) 早く出られる？ (イ) 早く出れる？	44.3*	45.1*	10.2	0.5

(4)(5)では、調査を始めた平成7年(1995年)以来、初めて「ら抜き」言葉が多数になりました(※参照)。年齢別にみると、「見られた」は年代が上がるに従って高くなり、60代以上で5割を超え、「見れた」を上回っています。一方「見れた」は、年代が下がるに従って高くなり、40代以下で5割を超え、「見られた」を上回っています。16~19歳は76.2%が「見れた」を使用しています。「出られ

る？」は、年代が高いほど高くなる傾向があり、70歳以上で5割台半ばとなっています。一方、「出れる？」は、年代が低くなるほど高くなる傾向があり、40代以下で5割を超え、「出られる？」を14~32ポイント上回っています。

文化庁はこの調査結果について、「食べれない」「来れますか」「考えれない」「見れた」「出れる？」は、これまで共通語においては誤りとされており、新聞などでもほとんど用いられていないと記しています。また、5年前の調査の際に文化庁は、「ら抜き」言葉は大正時代の小説にも出ているが、確実に増えてきており、今後も増加するとみられると指摘していました。まさにその通りの状況になっています。

私たちの日常生活を見ても、「ら抜き」言葉をよく耳にします。生徒の間でも、よく使われています。確かに、私たち大人も子供のころは、仲間うちで独特の言葉をつかっていたり、若者の間で流行っている言葉をつかっていたりした経験はあります。しかし、大人と話をするときや、正式な場面では「その言葉づかいは何ですか。正しく言葉をつかいなさい。」と大人に厳しく注意をされたものです。そのようなことを積み重ねることによって、子供たちは、正しい言葉づかいや時と場に応じた言葉づかいを身につけていったのです。「言葉は時代とともに変化するものである。」ということがよく言われます。それは事実でしょう。また、地域それぞれに独特の言葉が存在します。それはぜひ大切にしてほしいと思います。しかし、現在は、テレビやインターネットなどで乱れた言葉が氾濫しています。昔のように大人が厳しく注意することも激減しています。このような時代だからこそ、今一度、私たち大人が言葉づかいについて考え直す必要がありそうです。

中学生の時期になると、若者の言葉を流行として真似るといふ年頃になってきます。そのことを全て否定するつもりはありませんが、やはり時と場を考

えて言葉をつかっていけるように育てていくことは、私たち大人の役目です。

正しい言葉づかい、時と場に応じた言葉づかいは、相手を尊重し思いやることにつながります。本校は、都教育委員会の言語能力向上拠点校に指定されています。学校においても、言葉を大切にすることを通じて子供たちを育て、素晴らしい人間関係や社会をつくっていけるように指導してまいります。保護者、地域の皆様もぜひお力をお貸しください。

(7) 人権週間を機に

【ねらいと留意点】

21世紀は人権の世紀と言われている。そこで、12月の人権週間を機に、人権とは何か、中学生にできる人権尊重とはどのようなものかなどについて、考えていきたい。また、私たちの周りにも多くの人権に関わる問題が存在している。大人も一緒に人権についてもう一度考えていこうというメッセージを伝えたい。

【巻頭言】

ご存知の方も多いと思いますが、東日本大震災の被災地から県外に避難した中学生が、転校直後からいじめを受け、現在も不登校の状態が続いているというマスコミ報道がありました。その中学生は自身の手記に、「原発事故の賠償金をもらっているだろうなどと言いつけられ金銭を要求されたり、ばい菌と呼ばれ『放射能の影響ではないか』と不安になったりした」と綴っています。この報道に触れ「絶対にあってはならぬこと」と憤りを感じた方はたくさんいたはずです。

さて、今から70年近く前になりますが、1948年(昭和23年)12月10日、国際連合(いわゆる国連)が「世界人権宣言」というものを採択しています。その第1条には「すべての人間は、生まれながらにして平等である。」という意味のことが書かれています。国連は、この世界人権宣言を採択した12月10日という日を、「世界人権デー」と定めています。

そして、わが国では12月4日から世界人権デーの12月10日までの1週間を人権週間としています。まさに今月は、日本中、世界中で人権について考える機会なのです。

東京都は「東京都人権施策推進指針」において、

- ① 人間としての存在や尊厳が尊重され、思いやりに満ちた東京
- ② あらゆる差別を許さないという人権意識が広く社会に浸透した東京
- ③ 多様性を尊重し、そこから生じる様々な違いに寛容な東京

を基本理念として人権施策の推進に取り組み、国際都市にふさわしい人権が保障された都市を目指す、としています。

さらに、指針では「女性」「子供」「高齢者」「障害者」「同和問題」「アイヌの人々」「外国人」「HIV感染者・ハンセン病患者等」「犯罪被害者やその家族」「インターネットによる人権侵害」「北朝鮮による拉致問題」「災害に伴う人権問題」「ハラスメント」「性同一性障害者」「性的指向」「路上生活者」「様々な人権課題(刑を終えて出所した人、個人情報流出やプライバシー侵害、親子関係・国籍、人身取引等)」の人権課題について現状と施策の方向性を示しています。また、施策展開に当たっての考え方として、「助け合い・思いやりの心の醸成」「多様性への理解」「自己実現の支援」「公共性の視点」「公平な機会の確保」の5つをあげています。

21世紀は「人権の世紀」と言われていますが、残念ながら私たちの周りには、冒頭のマスコミ報道の事案をはじめ、様々な人権にかかわる問題が存在しています。生徒一人一人には、人権の意義・内容の重要性について理解し、自分の大切さとともに他の人の大切さを認めることができるようになってほしいと願います。そして、それが様々な場面や状況のもとで、具体的な態度や行動に表れ、人権が尊重

される社会づくりに向けた行動につながるようになってほしいと思います。今年で68回を迎える人権週間の啓発目標は「みんなで築こう 人権の世紀～考えよう 相手の気持ち 未来につなげよう 違いを認め合う心～」です。この人権週間を機に、私たち大人も生徒とともに人権について今一度考えてみようではありませんか。その積み重ねが「人権の世紀」を築き上げることにつながるはずです。

(8) 「3・11」「3・10」を忘れない

【ねらいと留意点】

3月11日は東日本大震災が発生した日であり、3月10日は太平洋戦争における東京大空襲の日である。この時期だからこそ、この災害や戦争から多くのことを学び、考え、教訓を得てほしいと伝えたい。また、朝礼講話や保護者会、地域の会議等でも話題にできるような内容を工夫したい。

【巻頭言】

「3・11」を忘れない

平成23年3月11日午後2時46分に発生した東日本大震災から6年になります。被災地では、未だに行方不明の方々がいらっしゃいます。復興に向けての取組も全力で行われています。私たちはそのことを決して忘れてはいけません。当時、今の中学生は小学1年生から3年生でした。小さな子供だった生徒たちは大きな揺れがあったこと、怖かったことなどは覚えています。当時の被災の様子や支援の様子などの詳細はよくわからないと思います。ぜひ、この時期にTVなどの報道や様々な情報から、東日本大震災について多くを学び、多くの教訓を得てほしいものです。

この大震災の際、地元の中学生たちは、進んでボランティア活動をしています。例えば、岩手県陸前高田市立横田中学校の生徒たちは、全校生徒が全国から届いた支援物資の仕分けの手伝いをしました。東京でもボランティア活動に取り組んだ生徒たちがいます。〇〇中から近い都立三田高校、芝商業高校

の生徒たちは、自分たちも帰宅できなかったのですが、学校に避難してきた人々のために、ボランティア活動をしました。毛布やマット、飲料水を配ったり、食事の用意や配膳をしたりしたそうです。また、中学校でもボランティアをしたところがあります。港区ではお台場学園港陽中の生徒たちが備蓄倉庫から毛布等を取り出したり、炊き出しを手伝ったりしました。

近い将来、東京地方にも大きな地震がやってくると言われています。もし、大きな災害に見舞われたら、「自分の命を守り、身近な人を助け、さらに地域に貢献する」ことができるようにしてほしいと思います。各家庭に配布されている東京都発行の「東京防災」という黄色の冊子などを参考にして、今からできる防災について今一度、考えていきましょう。

「3・10」を忘れない

この時期には、さらにもうひとつ考えてほしいことがあります。今から72年前の昭和20年（1945年）3月10日、太平洋戦争の末期、アメリカ軍の空襲によって東京の下町は焼け野原と化しました。墨田区・江東区・台東区を中心にした下町地区で約10万人の方々の尊い命が奪われました。港区の新橋、愛宕、虎の門、芝などの地域も、同じような状況だったと聞きます。その日を忘れてはいけない、戦争を絶対にしてはいけないという思いを込めて東京都は3月10日を「東京都平和の日」と定めています。

当然のことですが、戦争は絶対にあってはなりません。戦争によって多くの命が奪われることがあってはなりません。幸いにも日本は戦争に巻き込まれることなく、私たちは平和な生活を送ることができています。しかしその結果、今の中学生にとっては、遠い過去のこととして、教科書で学ぶ歴史の一部になってしまいがちです。平和な日本を築いてきた先人たちの努力を若者の世代にも引き継いでいき、平和な社会や生活を今後も継続できるようにし

ていきたいものです。世界に目を転じてみると、未だに紛争や争いが絶えません。人類の共通の願いである恒久平和について、戦争のない平和な世界について、「3・10」をきっかけに、今一度、考えてほしいと思います。

「3・11」「3・10」を忘れないためにも、学校はもちろんですが、各家庭や地域でも私たちに何ができるかを話し合っていきましょう。

(9) 伸び代は無限

【ねらいと留意点】

この巻頭言は、学年末に卒業、進級を控えた生徒たちへの期待を込めた内容としている。1年をふり返り、生徒が大きく成長したことを具体例とともに伝えたい。そして、「生徒の伸び代は無限」というメッセージを生徒、保護者、地域の皆様、教職員で共有したい。

【巻頭言】

早いもので今年度もあとわずかとなりました。3年生の卒業式までの登校日数は、今日3月1日を含め15日、1、2年生は修了式まで17日となりました。この1年を振り返ってみますと、〇〇中学校全体の力がさらに大きく伸びたように感じます。PTAの皆様は、会長を筆頭に明るく楽しくそして温かく常に学校を支えてくださいました。PTAの支えと協力は、学校にとってこの上なく大きな力となりました。全国表彰を受けたPTAは本校の誇りでもあります。地域の皆様は、広い視野から学校や生徒を見守ってくださり、常に「〇〇中愛」を注いでくださいました。地域の皆様の生徒へのお褒めの言葉が、生徒や教職員にとって計り知れないほどの自信につながったことは間違いありません。そして、何よりも生徒たちが多くの場面で活躍し、成長してくれたことが〇〇中のこの1年を象徴しています。日々の授業では、グループ・ディスカッションやプレゼンテーションで豊かな表現力を遺憾なく発揮してくれました。部活動では異年齢集団で明るく

元気に活動する姿が至る所にあり、本来の部活動の姿を見ることができました。生徒会や委員会活動では、校内はもとより地域においてもボランティア活動等を実践し、地域の子供たちの模範となり、地域社会に大きく貢献してくれました。紙面の都合で紹介しきれませんが、まだまだ多くの活躍と成長した生徒たちの姿がありました。

生徒の「伸び代は無限」です。生徒の力は信じられないほど大きなものがあります。私の経験の中でも、「これは難しいだろう」と教師が考えた課題をいとも簡単に乗り越えていく姿を幾度となく見ました。「もうこれで十分だろう」と大人が考えている状況よりはるかに上を見据えている生徒を何人も見ました。私たち教職員も今の状況に満足することなく、〇〇中生の力をさらに大きく伸ばしていくために、教育活動の工夫・改善を図ってまいります。保護者・地域の皆様の変わらぬご支援とご協力をお願いいたします。

私の本校への着任と時を同じくして本校に入学した生徒がもう卒業とは、まさに「光陰矢のごとし」です。その3年生は、当時の初々しい姿からは想像できないほど大きく、そして立派に成長し、〇〇中のリーダーとして頑張ってくれました。本校へ通う時間はわずかとなりましたが、卒業までにやれることはまだあります。それらに全力で取り組み、有終の美を飾ってほしいと思っています。そして、新たな世界へ羽ばたいて行ってほしいと願っています。

卒業を控えた3年生にとっても、彼らを引き継ぐ1、2年生にとっても、これから先、時には壁にぶつかることがあるでしょう。しかし、いつでも自分を信じ、友達を信じ、家族を信じ、教職員やかかわりのある人たちとともに様々なことに前向きに取り組んで行ってほしいと願っています。「伸び代は無限」なのですから。

3. まとめとして

校長を退職して5年目を迎えようとしている。校長として勤務した3校から毎月、学校だよりが送られてくる。必ず校長先生の巻頭言から目を通して見る。どの校長先生の巻頭言も文章や扱う題材には特徴が現れているが、共通して言えることは「こんな児童・生徒を育てたい」「学校を〇〇にしたい」「保護者や地域の皆様の協力へ感謝したい」ということが熱く語られていることである。私も巻頭言を書くときには自然に熱が入ってしまったことを思い出す。巻頭言はある意味私自身にとって、自分の学校教育に対する思いを再整理する貴重な場だったのかもしれない。

校長をしていた当時、地域の会議である方から「学校だよりの校長先生の文を毎回楽しみに読んでいます。」と言われたことがある。学校だよりは巻頭言よりも生徒の様子や学校教育の様子に関わる記事に興味をもたれる方が多いのは事実かもしれない。しかし、私はその言葉を耳にして心の底から微笑んでしまった。巻頭言に書いた私のメッセージを受け取っている方がいらっしゃることは、私にとって大きな支えになった。それまで以上に巻頭言に気合いを入れたことを思い出す。

本稿は、校長先生や副校長先生、教頭先生やミドルリーダーの先生方を意識してまとめたものである。先生方のメッセージを発信する際の一助になってくれるのであればうれしい限りである。